豊橋市埋蔵文化財調査報告書第32集

百々池B古窯
東田遺跡(II)

1996年6月

豊橋市教育委員会

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第32集

百々池B古窯
東田遺跡(II)

1996年6月

豊橋市教育委員会

百々池Ｂ古窯

豊橋リサーチパーク建設に伴う埋蔵文化財範囲確認調査報告書

例　　言

1．本書は、豊橋市西幸町字浜池において豊橋リサーチパーク建設に伴い実施された埋蔵文化財範囲確認調査の報告書である。調査期間は、平成5年度調査が平成5年8月2日～8月20日で、平成6年度調査が平成7年3月27～30日である。

2．平成5年度調査は豊橋市教育委員会が行い、岩瀬彰利（文化振興課文化財係）が担当した。平成6年度調査は豊橋市から委託を受けた豊橋遺跡調査会が行い、岩瀬彰利（同）が調査の指導に当たった。

3．報告書作成にあたり、遺物・遺構等の実測・拓本・トレース等については、多田美香、山本絢子、氏原久枝各氏の援助を受けた。また、写真撮影は岩瀬が行った。

4．発掘調査に際しては事業担当課である工業勤労課より援助を受けた。発掘作業、整理作業については、地元の方々の御協力を得ることができた。記して感謝の意を表す次第である。

5．本書の執筆・編集は岩瀬が行った。

6．本書に使用した方位は磁北である。遺物・遺構のスケールはそれぞれに明示した。なお、写真の縮尺は任意である。

7．本調査にあたって作成した写真・カラースライド・実測図等の記録、出土遺物は豊橋市教育委員会において保管している。

目　　次

第１章　遺跡の立地と歴史的環境
　１．遺跡の立地 …… 1
　２．歴史的環境 …… 3
第２章　調査の経過 …… 5
第３章　平成５年度調査
　１．試掘調査 …… 8
　２．出土遺物 …… 11
第４章　平成６年度調査 …… 20
第５章　まとめ …… 21

挿図目次

第１図　調査区位置図（１／50,000） …… 2
第２図　周辺部主要遺跡分布図（１／25,000） …… 4
第３図　試掘トレンチ位置図（１／2,500） …… 6
第４図　トレンチ平面図・断面図（１／50） …… 10
第５図　出土遺物実測図－１（１／３） …… 14
第６図　出土遺物実測図－２（１／３） …… 15
第７図　出土遺物実測図－３（１／３） …… 16
第８図　出土遺物実測図－４（１／３） …… 17
第９図　グリッドシステム図（１／400） …… 20
第10図　灰原範囲推定図（１／200） …… 22

表　目　次

第１表 トレンチ一覧表 …… 7
第２表 出土遺物観察表 …… 18

写真図版目次

図版１－１　８トレンチ全景（南から）
　　　２　13トレンチ全景（東から）
　　　３　14トレンチ全景（西から）
　　　４　15トレンチ全景（東から）
　２－１　16トレンチ全景（西から）
　　　２　17トレンチ全景（南から）
　　　３　18トレンチ全景（東から）
　　　４　19トレンチ全景（西から）
　３－１　14トレンチ西端凹み部（南から）
　　　２　13トレンチ灰原堆積状況（南東から）
　４　　出土遺物

第1章　遺跡の立地と歴史的環境

1．遺跡の立地（第1図）

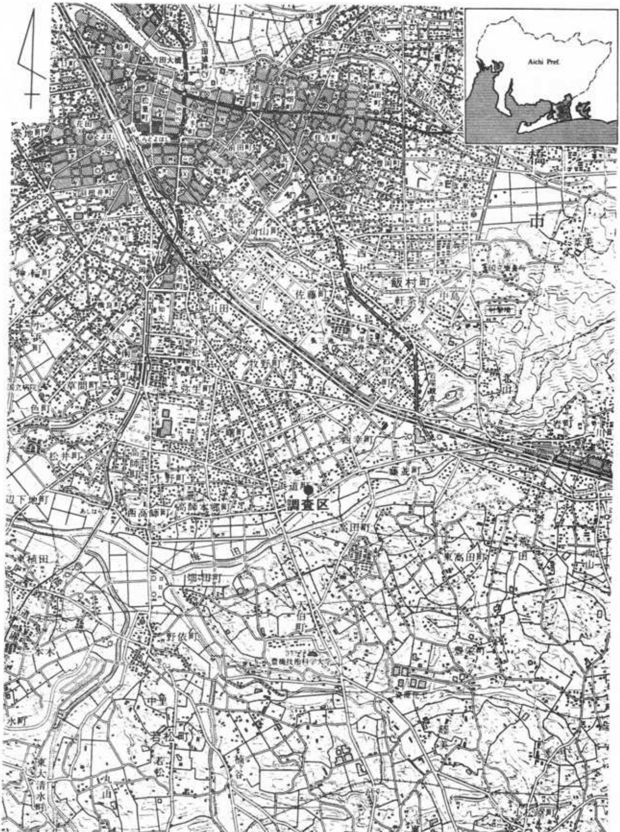
百々池Ｂ古窯址は豊橋市西幸町字浜池に所在する古窯址である（第1図）。豊橋市は東を弓張山地、南を太平洋、西を三河湾にそれぞれ面するように平野部が限られている。市域北側は一級河川である豊川が三河湾に向かって西流し、市域の大半は豊川と現在浜松市を貫流する天竜川の前身である古天竜川によって造られた河岸段丘上に位置している。河岸段丘は高位面（天伯原面・標高30～60ｍ）、中位面（高師原面・豊橋上位面・標高15～30ｍ）、低位面（豊橋面・標高4～10ｍ）の大きく3面に分けることができる。

百々池Ｂ古窯址は、豊橋市南部の梅田川の中流域、右岸の河岸段丘・中位面の段丘崖にある。梅田川は、豊橋市と静岡県湖西市の県境となっている弓張山系の山地に源を発し、三河湾へと流れる長さ約19kmの2級河川である。梅田川の北側には中位段丘面の高師原面があり、豊川によって運ばれて堆積した高師原礫層からなるいわゆる「三万年段丘」である。この段丘は温暖な気候の下で堆積したので、土壌中の鉄分が酸化して土の色が赤くなる赤色風化をおこしている。このため、この台地は酸性土壌になり、木の根に酸化鉄が付着したいわゆる“高師小僧”が多量に出土し、名称の由来地のため愛知県の天然記念物に指定されている。古窯址の近くに史跡指定地があり、古窯址周辺からも“高師小僧”が採集できる程である。この台地は形成時期が新しいので侵食は進んでおらず、表面は比較的平坦である。

前述したように、百々池Ｂ古窯址は高師原面南端の段丘崖にあり、標高は16ｍ前後である。このあたりの段丘崖は梅田川の沖積平野と比高差6～8ｍ程を測り明瞭である。段丘崖は比較的緩斜面で、傾斜角11°程であり、現況では雑木林になっている。古窯址のある段丘崖の西側は、梅田川の支流の百々川によって開析されている。このあたりは、最近まで豊橋市の西幸苗園として樹木の苗木が育てられていたところで、大規模な土地造成等は行われず、比較的地形は自然のままである。しかし、苗場として使われていた所などは削平などの造成が行われ、道路も設置されている。このため、古窯址上を道路が通り、この部分のみ削平が行われていた。

参考文献

豊橋市史編集委員会　1973　『豊橋市史』第1巻
水野季彦　1989　「付載　梅田川谷底平野の自然環境」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第10集
桜遺跡試掘調査報告書』



第1図　調査区位置図（1／50,000）

2．歴史的環境（第2図）

百々池Ｂ古窯址のある西幸地区は、梅田川の中流域にあたり縄文～中世の遺跡や灰釉陶器窯の多い地域として知られている（註１）。

縄文時代の遺跡は多数所在しているが、なかでも東原遺跡（28)、桜遺跡（10）等が知られている。東原遺跡は愛知大学考古学研究会によって1987年から８次に渡る調査（註２）が行われている。調査では市内でも最古級の草創期の土器片と早期の神宮寺式併行の押型文土器や撚糸文土器、前期の清水ノ上Ⅰ・Ⅱ式土器や条痕文土器が出土している。桜遺跡は昭和60年に試掘調査（註３）が行われ、縄文時代前期～晩期の土器や石器等が出土している。このうち、縄文土器は各型式がほぼ継続して出土しており、長期的に続いた集落であった可能性が考えられる。

弥生時代の遺跡も多く見つかっており、西川遺跡（35)、中島遺跡（９）等の遺跡が知られている。これらの遺跡は、弥生土器等の遺物が採集されているが、本格的に調査されたものは少なく不明な点が多いといえよう。

古墳時代になると遺跡は余り発見されておらず、雉子山遺跡（31）等が僅かに知られているに過ぎない。また古墳も梅田川の上流域と下流域では確認されているが、中流域では見つかっていない。

古代になると、灰釉陶器の古窯址がこの地域にも多く分布しており、一大生産地を形成している。この地区では岩屋下古窯址（16)、小谷古窯址（４）などが確認されている（註４)。このうち、岩屋下古窯址は1982年に発掘調査が行われ、灰釉陶器を生産した窯体１基及び灰原の一部を検出した。遺物では灰釉陶器（碗・皿・壷・甕等)、窯道具（トチ）が出土している。小谷古窯址は1976年に宅地造成工事に伴い発掘調査が行われている。調査の結果、窯体は燃焼室、焚口以外は県道によって破壊されていたが灰原から多量の遺物が出土している。遺物は灰釉陶器の碗、中皿、小皿、鉢、長頸瓶、陶丸、窯道具等が出土している。

中世になると、天伯原台地南部を中心に中世陶器の生産が行われている。集落址は、この地区はまだ調査が進んでいないため不明であり、鎌田遺跡（34)、桜遺跡等で遺物が採集されているに過ぎない。しかし、鎌田遺跡などでは中世の貝層等が検出（註５）されている。また、古墓として西新屋古墓群（38）が知られている。この古墓群からは13～14世紀代の古瀬戸・瓶子を中心とした蔵骨器が11個体出土している。

城址には畔田氏の居城である上地城址（36)、雉子山城址（32）等が知られている。

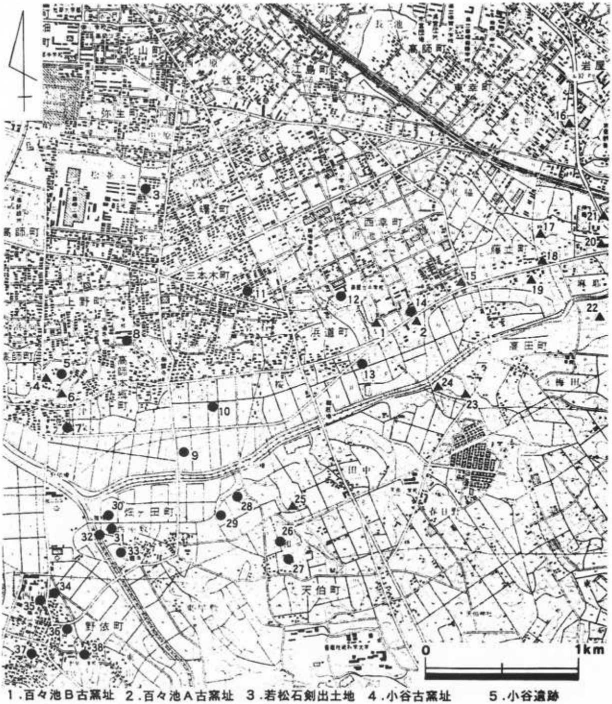
註１　伊藤恵・芳賀陽　1976　『高師風土記』

註２　愛知大学考古学研究会　1979～1986　『東原遺跡発掘調査概要』第１次～８次

註３　豊橋市教育委員会　1989　『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第10集　桜遺跡試掘調査報告書』

註４　註１と同じ。

註５　森田勝三　1979　「豊橋市野依町・鎌田遺跡の破壊について」　『足跡』第３号



1.百々池B古窯址	2.百々池A古窯址	3.若松石剣出土地	4.小谷古窯址	5.小谷遺跡
6.津森古窯址	7.津森遺跡	8.上原遺跡	9.中島遺跡	10.桜遺跡
11.高地遺跡	12.県天然記念物 高師小僧指定地	13.芝切遺跡	14.古並遺跡	15.古並古窯址
16.岩屋下古窯址	17.天王池古窯址	18.摩耶A古窯址	19.摩耶B古窯址	20.久保田A古窯址
21.久保田B古窯址	22.八反田古窯址	23.高田古窯址	24.天伯古窯址	25.三和古窯址
26.大穴池西遺跡	27.西天伯遺跡	28.東原遺跡	29.畑ヶ田遺跡	30.落合遺跡
31.雉子山遺跡	32.雉子山城址	33.仏餉遺跡	34.鎌田遺跡	35.西川遺跡
36.上地城址	37.中世古館址	38.西新屋古墓群	▲は古窯址、●はその他の遺跡等	

第2図　周辺部主要遺跡分布図（1／25,000）

第2章　調査の経過

豊橋市では21世紀の地域を創造するために、豊かな人間生活、先端的な科学技術、生命を包み込む自然環境の調和を目指してサイエンス・クリエイト21計画を策定し、昭和61年6月にサイエンス・クリエイト21策定委員会が発足した。この計画は、具体的には国立豊橋技術科学大学と民間企業が提携して先端技術の研究を行うもので、産学官共同研究開発の拠点基盤を整備することであった。この計画の第1弾として産学官共同開発の場、豊橋サイエンス・コアが建設されることになった。建物建設の場所は現在豊橋市所有の西幸苗園であった。このことから、平成3年に豊橋市（工業勤労課担当）から愛知県教育委員会あての埋蔵文化財所在の有無の照会が豊橋市教育委員会に提出された。豊橋市教育委員会では、隣接地に百々池古窯址と未命名の古窯址が存在していたため、土地造成範囲内を試掘調査した。試掘調査では遺物・遺構は確認されず、埋蔵文化財は所在していないことが確認された。このため、建設工事は平成3年10月着工し、平成4年11月に豊橋サイエンス・コアとしてオープンした。

その後、サイエンス・コア周辺を豊橋リサーチパークとして開発する計画が策定された。リサーチパークとはサイエンス・コアを拠点とし、民間企業や研究所等、高水準の研究レベルを有する企業を誘致し、高次産業業務拠点を目的とした工業団地のことで、コア周辺に整備する計画であった。このため、平成5年にコア周辺の西幸苗場と豊橋土木維持事務所を含めた造成予定地の埋蔵文化財所在の有無の確認が豊橋市（工業勤労課担当）よりあった。計画では、百々川周辺の雑木林は保安林のため開発せず残し、残りの地区を開発するということであった。豊橋市教育委員会では、計画範囲内に未命名の古窯址があることから、リサーチ・パーク内の造成工事を行う部分について試掘調査を行い、埋蔵文化財所在の有無を調べることにした。試掘調査は平成5年8月2～20日にかけて行った。調査は計画区域内にトレンチを任意に設定し行った。なかでも未命名の古窯址にトレンチを設定したところ、灰原が良好に残存していることが確認できた。このため、窯体及び灰原の範囲を確認することに務め、多くのトレンチを設定した。この結果、窯体位置は確定しないものの1基以上存在している可能性が強いことが分かった。また、この古窯址は未命名であったため、従来百々池古窯と呼ばれていたところ（註1）を百々池A古窯址、今回調査した未命名の古窯址を百々池B古窯址として登録し直した。

調査範囲内からは、古窯址以外の埋蔵文化財は見つからなかったため、文化振興課と工業勤労課とで再度所在する古窯址について協議した。幸いにも、リサーチ・パークは設計段階にまだ入っていなかったため、市教育委員会は工業勤労課に対し、古窯址は記録保存ではなく現地を公園にして保存するように要望した。これに対し工業勤労課は現地を公園として古窯址を保存する予定で調整をとることを約束し、今後実施設計に入る段階で、協議することになった。

後に何度か打ち合せを重ね、平成7年1月に再度古窯址の保存の仕方で協議した際、前回まで保安林として残す予定であった地区を、掘削して新たに散策路をつくるというように計画を変更する案が浮上したことが工業勤労課より提示された。市教育委員会では、現地が前回の調査対象地からは外され未調査であることと、台地斜面であるために古窯址が存在する可能性が考えられることから計画前

に埋蔵文化財の有無の確認の調査の必要を示した。この指導を受けて、豊橋市と豊橋遺跡調査会とで埋蔵文化財所在確認調査の委託契約が結ばれ、豊橋遺跡調査会が調査を行った。

調査方法は、分布調査を基本とし、遺物の有無を確認しながら踏査し、古窯址が存在しそうな場所は必要に応じて試掘調査を行い、埋蔵文化財の有無を確認する方法であった。調査は平成７年３月27日～31日まで行った。調査の結果では、新たに造成対象になった地区内からは埋蔵文化財は確認されなかった。この報告を受け、教育委員会では豊橋市に対し造成工事に関して支障ないことを連絡した。

註１　愛知県教育委員会　1983『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）（尾北地区・三河地区）』
　　　愛知県教育委員会　1990『愛知県遺跡分布地図（Ⅲ）－東三河地区－』

第３図　試掘トレンチ位置図（1／2,500）

第1表　トレンチ一覧表

トレンチ名	規模（m）	遺構・遺物	トレンチ名	規模（m）	遺構・遺物
1トレンチ	0.6×10.75	なし	26トレンチ	0.6×42.5	なし
2トレンチ	0.6×14.25	なし	27トレンチ	0.6×35	陶器1点
3トレンチ	0.6×30.75	なし	28トレンチ	0.6×20	なし
4トレンチ	0.6×13.25	なし	29トレンチ	0.6×41.25	なし
5トレンチ	0.6×12	なし	30トレンチ	0.6×19.25	なし
6トレンチ	0.6×8.25	なし	31トレンチ	0.6×42.5	なし
7トレンチ	0.6×18.75	灰釉陶器5点	32トレンチ	0.6×25	なし
8トレンチ	0.6×9	灰釉陶器約100点	33トレンチ	0.6×12.5	なし
9トレンチ	0.6×6.2	灰釉陶器・陶器10点	34トレンチ	0.6×13.75	なし
10トレンチ	0.6×16.75	なし	35トレンチ	0.6×37.5	なし
11トレンチ	0.6×10.25	灰釉陶器1点	36トレンチ	0.6×7	なし
12トレンチ	0.6×5.5	なし	37トレンチ	0.6×11.75	なし
13トレンチ	0.7×7	土壙2基	38トレンチ	0.6×21.25	なし
14トレンチ	0.8×6.5	窯壁、灰釉陶器多量	39トレンチ	0.6×48.75	なし
15トレンチ	0.6×5.5	灰原、灰釉陶器多量	40トレンチ	0.6×42.5	なし
16トレンチ	0.8×2	灰原、灰釉約100点	41トレンチ	0.6×30.5	なし
17トレンチ	0.5×2.4	焼土、灰釉陶器5点	42トレンチ	0.6×43.75	なし
18トレンチ	0.3×4.5	なし	43トレンチ	0.6×31.25	なし
19トレンチ	0.6×5.5	なし	44トレンチ	0.6×10.75	なし
20トレンチ	0.4×11	なし	45トレンチ	0.6×13	なし
21トレンチ	0.6×21.25	なし	46トレンチ	0.6×4.5	なし
22トレンチ	0.6×13.25	なし	47トレンチ	0.6×8.25	なし
23トレンチ	0.6×6.25	なし	48トレンチ	0.6×8.75	なし
24トレンチ	0.6×27.5	なし	49トレンチ	0.6×18	なし
25トレンチ	0.6×27.5	なし	50トレンチ	0.6×13.75	なし

第3章　平成5年度調査

1．試掘調査（第4図・第1表）

試掘調査は、リサーチ・パーク範囲内の造成箇所にトレンチを設定して行った。トレンチは幅60cmを原則として任意の長さで設定し、基本的に表土剥ぎは重機によって行ったが、古窯址周辺及び重機による掘削が困難な地点はすべて手掘りによって掘り下げを行っている。トレンチは全部で50ケ所設定した。各トレンチの設置箇所及び規模・概要は第4図・第1表のとおりである。ここでは灰原や窯壁等の確認されたトレンチについて層位・遺構の説明を行う。出土遺物の詳細については次節で説明する。

13トレンチ（第4図1）

13トレンチは、台地斜面中腹に東西方向に設定した0.7m×7mの規模のトレンチである。

層位と遺構

①暗茶褐色腐食土（表土）は厚さ約10cmで、その下には②淡茶褐色粘質土が厚さ40cm前後で堆積していた。②の下には③暗茶褐色粘質土が約40cmの厚さで堆積していた。この層下は④茶褐色粘土（地山）であった。地山にはＳＫ－１・２の土壙２基が掘り込まれていた。ＳＫ－１は長径60cmの楕円形の土壙で、検出面での深さは38cmを測る。ＳＫ－２は径28cmの円形の土壙で、深さは19cmである。遺物は出土していない。

14トレンチ（第4図2）

14トレンチは、台地斜面中腹、13トレンチの南に東西方向に設定した0.8m×6.5mの規模のトレンチである。

層位と遺構

基本的な層位は①黄褐色粘質土（表土）は東に向かって緩やかに傾斜し、18～48cmの厚さで堆積ししている。その下にはトレンチ中央部に灰原と思われる④黒褐色砂質土が厚さ20cm程堆積していた。この層の西側は掘り込みによって壊され、東側も窯壁までで両端は確認できなかった。④層の下には焼土が検出された。焼土は厚さ最大８cmで④層と同じくトレンチ中央に分布し、両端は掘り込みと窯壁で確認できなかった。焼土の下には、⑤暗灰褐色砂質土があり、その下が⑧茶褐色粘土（地山）である。トレンチの西端には、凹み部がみられ、地山が焼けていた。この凹み部は、幅10cm程の窯壁の内側が窯壁上部から深さ30cm程に湾曲して凹むもので、凹み部には③黒色砂質土が埋まっていた。これらのことから、トレンチ端部の凹み部は窯体の一部である可能性もあり、中央部の焼土及び窯壁群は本来そこに窯体があって壊されたか、もしくは壊された窯体の破片が再堆積したものと思われる。出土遺物はトレンチ中央部及び凹み部を中心に灰釉陶器・碗・瓶や窯壁が出土している。

15トレンチ（第4図3）

15トレンチは、台地斜面下、16トレンチの南に東西方向に設定した0.6m×5.5mの規模のトレンチである。

層位と遺構

15トレンチの大半は樹木移植のための掘削によって攪乱されていた。①淡茶褐色粘質土はこの時の埋土であり最大約80cmの厚さで④茶褐色粘土（地山）まで達して埋まっていた。恐らく②茶褐色粘質土が旧表土であったものと思われる。その下には③黒色砂質土（灰原）が検出された。灰原は一部掘削によって破壊されていたが、それ以外は残りが良好で最大約38cmを測り、トレンチ全体に広がっていた。出土遺物は灰原を中心に灰釉陶器の碗・瓶等が多量に出土している。

16トレンチ（第4図4）

16トレンチは、台地斜面下面端部、14トレンチと15トレンチの間に東西方向に設定した0.8m×2mの規模のトレンチである。

層位と遺構

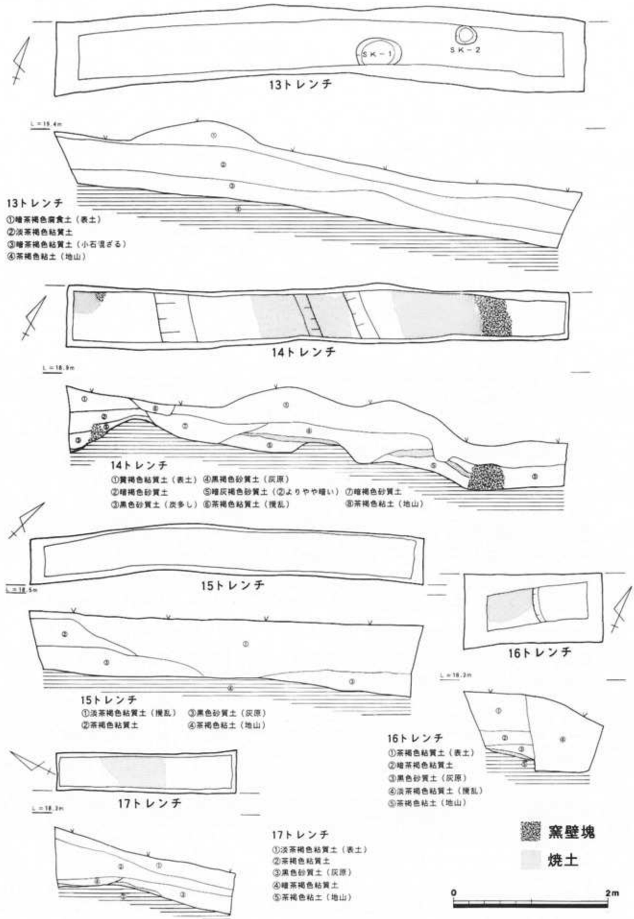
トレンチは東側半分、約1m強の範囲が樹木移植のための掘削で攪乱されていたが、西側半分は良好に残っていた。①茶褐色粘質土（表土）は約50cmと厚く、その下には②暗茶褐色粘質土が堆積し、更にその下には③黒色砂質土（灰原）が厚さ最大約15cmで広がっていた。灰原の下には60cm×40cmの範囲で焼土が確認できた。焼土は、厚さ約2cmで赤褐色に変色しているが焼きしまってはいない。窯体の一部の可能性が考えられる。遺物は灰原を中心に灰釉陶器・碗・瓶等が多量に出土している。

17トレンチ（第4図5）

17トレンチは、台地斜面下端部、16トレンチの道路を挟んだ西側に南北方向に設定した0.5m×2.4mの規模のトレンチである。

層位と遺構

①淡茶褐色粘質土（表土）が厚さ最大約20cmあり、その下には②茶褐色粘質土が堆積している。②層は北の台地側は厚さ52cmと厚く、南の平坦面側は約10cmと薄く傾斜して堆積している。この下には③黒色砂質土（灰原）が厚さ約20cmで堆積していた。灰原は北側が⑤茶褐色粘土（地山）と共に削平されており、④暗茶褐色粘質土が埋土として堆積している。灰原と地山の境部分には焼土が厚さ4cm程認められたが、北側部分は灰原、地山と共に削平されていた。遺物は灰原を中心に灰釉陶器・碗・瓶、須恵器・坏身などが出土している。



第４図　トレンチ平面図・断面図（1／50）

2．出土遺物（第5図・第2表）

出土した遺物は、コンテナ（54×33×20cm）4箱程であった。出土遺物には須恵器・坏・甕、灰釉陶器・碗・皿・段皿・長頸瓶がある。ここでは、出土土器について器種分類を行い、器種ごとに便宜的に分類して説明する。このためトレンチ・層位ごとに分けては説明を行わない。出土トレンチ、層位については第2表を参照して頂きたい。

A．須恵器

坏（第5図1）

底部付近のみ残存している。高台のつかない平底の坏であり、底部に糸切り痕をそのまま残している。調整は内外面ナデである。

甕（第5図2～5）

口縁部破片（2・3）と肩部破片（4）、底部破片（5）が出土している。口縁部は大きく外方に開き、口縁端部は下方に肥厚し口縁帯をつくっている。肩部は屈曲し、頸部はロクロナデ、肩部はタタキがみられる。底部は平底で外面にタタキがみられるが、接地面付近は板ナデ状の調整が行われている。

B．灰釉陶器

碗（第5図6～92）

1類（6～14）

口縁部は緩やかに内湾し端部付近でやや外方に開くか真っ直ぐの器形で、灰釉を漬け掛けによって体部内外面に施すもの。

a．いわゆる三日月高台を有すもの。（6～9）

b．比較的細く高い高台を有すもの。（10～12）

c．いわゆる三角高台を有すもの。（13）

d．接地部に面をもつ高台を有すもの。（14）

2類（15）

口縁部は緩やかに内湾し端部付近でやや外方に開き、高台は外開きの丸みのある器形で、無釉なもの。

3類（16・17）

口縁部は緩やかに内湾し端部付近でやや外方に開く器形であり、無釉で口縁部に輪花のみられるもの。

4類（18～32）

底部を欠損しているものをまとめてこの類とした。

a．灰釉を漬け掛けによって体部内外面に施すもの。（18～30）

b．無釉のもの。（31・32）

5類（33～66）

口縁部を欠損しているものをこの類とした。

a．いわゆる三日月高台を有すもの。（33～35）

b．いわゆる三角高台を有すもの。（36～40）

c．いわゆる三日月高台に類するもの。（41～43）

d．外開きの丸みのある高台を有すもの。（44～47）

e．接地部に面をもつ高台を有すもの。（48～51）

f．比較的細く高い高台を有すもの。（52～66）

6類（67～70）

重ね焼きで、自然釉のために融着したものをまとめた。口縁部は緩やかに内湾し、端部付近でやや外方へ開く器形である。

a．外開きの丸みのある高台を有すもの。（67・69）

b．比較的細く高い高台を有すもの。（68・70・71）

皿（第7図72～75）

1類（72・73）

口縁部は直線に伸び、端部付近でやや外方に開くか真っ直ぐの器形で、灰釉を漬け掛けによって体部内外面に施すもの。

a．いわゆる三日月高台に類するもの。（72）

d．丸みのある高台を有すもの。（73）

2類（74・75）

いわゆる段皿であり、口縁部は直線に伸び体部で段をなし、端部付近でやや外方に開くか真っ直ぐの器形で、灰釉を漬け掛けによって体部内外面に施すもの。

a．いわゆる三日月高台を有すもの。（74）

b．底部を欠損しているもの。（75）

底部のみ（第7図76～92）

口縁部を欠損し、底部のみで碗か皿の器形の判別の難しいものである。

a．いわゆる三日月高台を有すもの。（76～79）

b．いわゆる三角高台を有すもの。（80）

c．いわゆる三日月高台に類するもの。（81・82）

d．外開きの丸みのある高台を有すもの。（83）

e．接地部に面をもつ高台を有すもの。(84・85)

f．比較的細く高い高台を有すもの。(87〜92)

長頸瓶（第8図93〜108）

1類（93〜97）

長頸瓶の口縁部破片であり、口縁は大きく外反し、口縁端部が断面三角形のもの。

a．頸部径が10cmくらいのもの。(93・95)

b．頸部径が8cmくらいの比較的細いもの。(94)

c．頸部径が12cmくらいの比較的広いもの。(96)

2類（98〜100）

長頸瓶の口縁部破片であり、口縁は大きく外反し、口縁端部が上方へ引き上げられるもの。

3類（101〜103）

長頸瓶の頸部及び肩部破片である。

a．頸部は屈曲して立ち上がり、頸部径は比較的大きく、肩部は強く膨らむもの。(101)

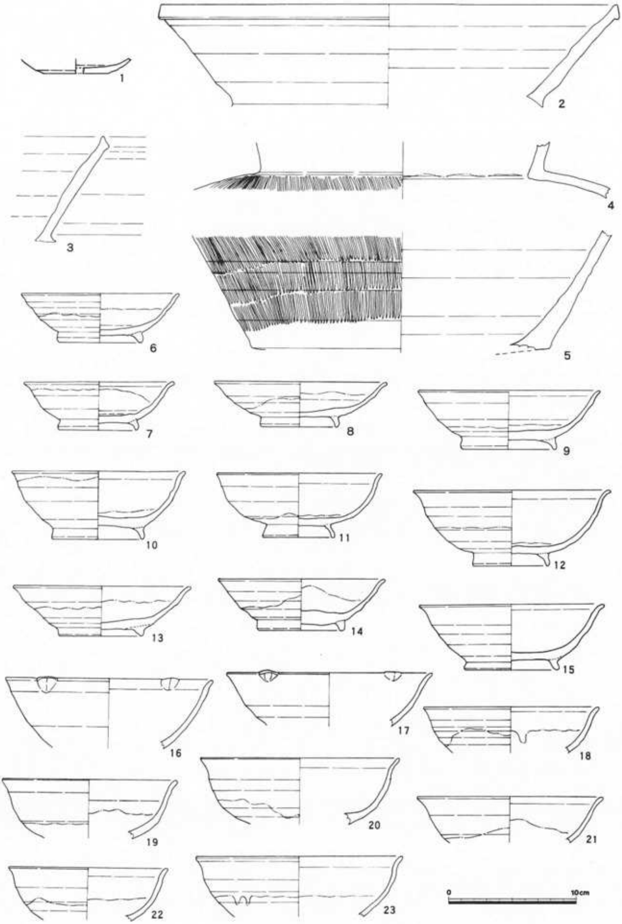
b．頸部は屈曲して立ち上がるが頸部径は比較的小さく、肩部は強く膨らまないいわゆる「なで肩」なもの。(102・103)

c．頸部を欠損した肩部の破片で、肩部が膨らみが少し弱いいわゆる「なで肩」なもの。(104)

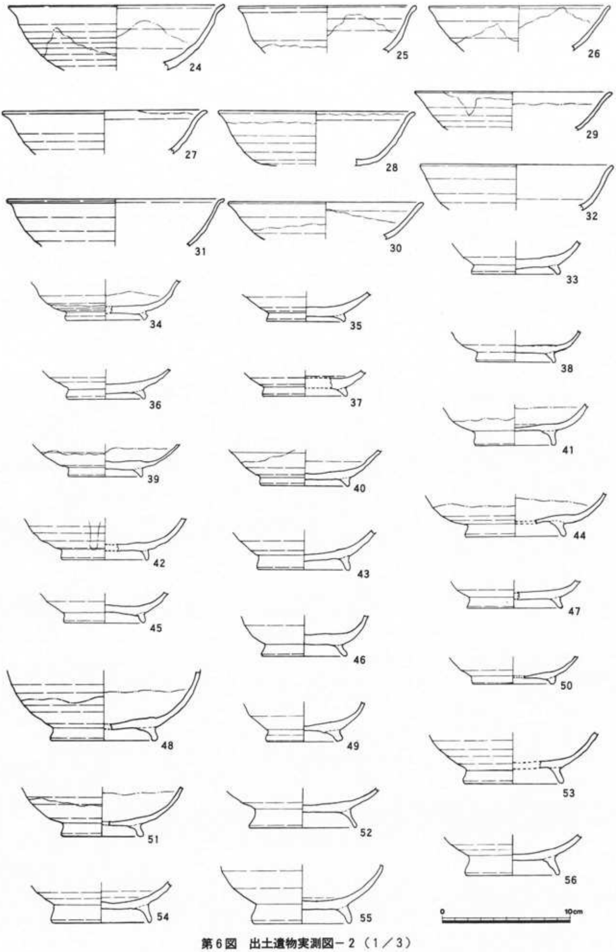
d．頸部を欠損した肩部の破片で、肩部が強く膨らむもの。(105・106)

4類（107・108）

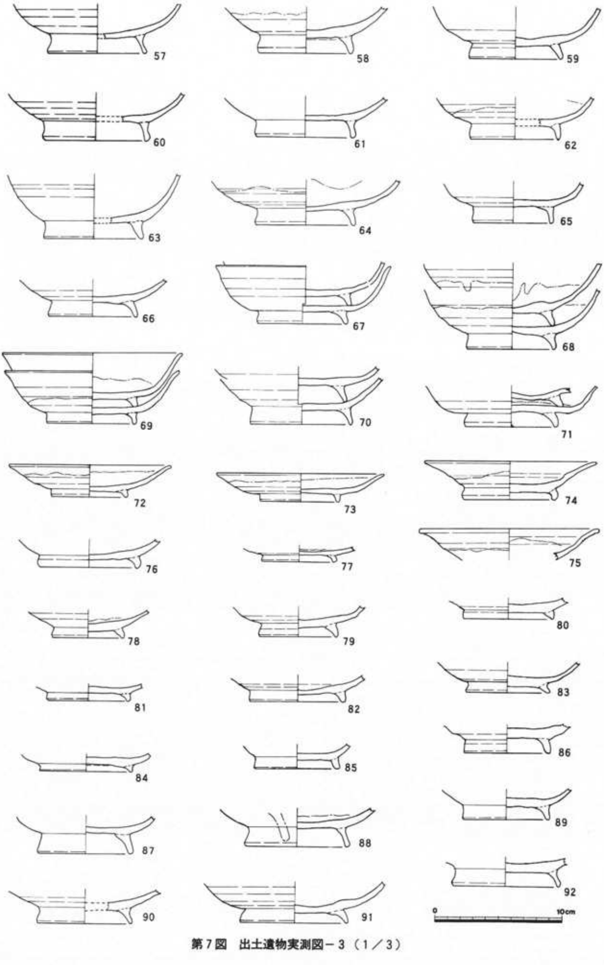
底部破片であり、高台形は断面四角形で内面に面をもつものである。(107・108)



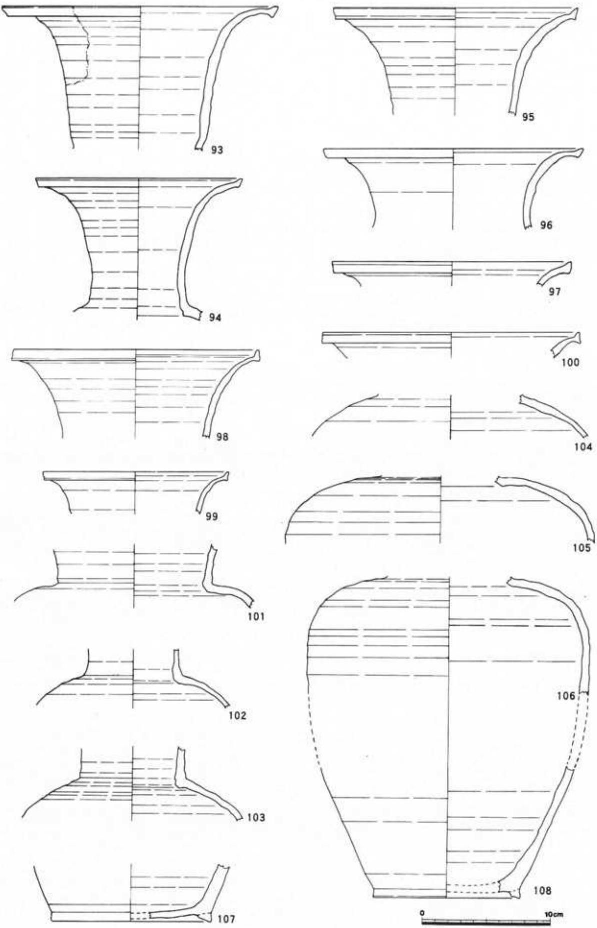
第５図　出土遺物実測図－１（1／3）



第６図　出土遺物実測図－２（１／３）



第７図　出土遺物実測図－３（１／３）



第8図　出土遺物実測図－4（1／3）

第2表　出土遺物観察表

遺物No.	層位・遺構	種類・器種	口径	器高	底径等	胎土	焼成	色調	調整等	備考
1	17トレ•灰原	S・坏		(1.1)	5.0	密	良好	淡灰褐色	ロクロナデ、底糸切り	
2	8トレ	S・甕	35.7	(6.7)		密	良好	灰白色	ロクロナデ	
3	14トレ	S・甕				密	良好	淡灰褐色	ロクロナデ	
4	13トレ	S・甕		(4.4)	頸22.2	密	良好	灰白色	ロクロナデ	
5	14トレ	S・甕		(9.3)	23.2	密	良好	暗灰色	外タタキ、内ロクロナデ	
6	14トレ	K・碗	12.2	3.8	台 6.4	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
7	14トレ	K・碗	11.7	3.8	台 6.0	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
8	14トレ	K・碗	13.4	3.5	台 5.8	密	良好	暗灰色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
9	14トレ	K・碗	14.2	4.6	台 7.2	密	良好	淡褐色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
10	15トレ•灰原	K・碗	13.4	5.3	台 7.0	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
11	15トレ•灰原	K・碗	14.4	4.3	台 5.6	密	良好	暗灰色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
12	15トレ•灰原	K・碗	15.4	5.9	台 5.8	密	良好	暗灰色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
13	14トレ	K・碗	13.8	3.9	台 6.4	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
14	14トレ	K・碗	13.0	4.0	台 6.4	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
15	14トレ	K・碗	14.2	5.1	台 7.2	密	良好	茶灰色	ロクロナデ、底糸切り	
16	14トレ	K・碗	16.0	(5.4)		密	良好	灰白色	ロクロナデ	灰釉輪花
17	14トレ	K・碗	16.0	(4.2)		密	良好	灰白色	ロクロナデ	輪花
18	14トレ	K・碗	14.6	(3.6)		密	良好	淡灰褐色	ロクロナデ	灰釉
19	17トレ•灰原	K・碗	13.6	(4.6)		密	良好	灰褐色	ロクロナデ	灰釉
20	8トレ	K・碗	15.6	(5.1)		密	良好	灰白色	ロクロナデ	灰釉
21	14トレ	K・碗	14.4	(3.6)		密	良好	灰白色	ロクロナデ	灰釉
22	15トレ•灰原	K・碗	12.3	(4.1)		密	良好	灰褐色	ロクロナデ	灰釉
23	14トレ	K・碗	16.0	(4.7)		密	良好	灰白色	ロクロナデ	灰釉
24	14トレ	K・碗	16.8	(5.0)		密	良好	灰白色	ロクロナデ	灰釉
25	表採	K・碗	13.8	(3.7)		密	良好	淡灰褐色	ロクロナデ	灰釉
26	14トレ	K・碗	14.0	(3.5)		密	良好	灰白色	ロクロナデ	灰釉
27	14トレ	K・碗	15.6	(3.4)		密	良好	暗灰色	ロクロナデ	灰釉
28	14トレ	K・碗	15.0	(4.2)		密	良好	暗灰色	ロクロナデ	灰釉
29	16トレ•灰原	K・碗	15.0	(3.0)		密	ヤヤ良好	暗灰色	ロクロナデ	灰釉
30	14トレ	K・碗	15.0	(2.9)		密	良好	灰白色	ロクロナデ	灰釉
31	14トレ	K・碗	17.0	(3.7)		密	良好	灰白色	ロクロナデ	
32	14トレ	K・碗	15.0	(3.5)		密	良好	灰白色	ロクロナデ	
33	15トレ•灰原	K・碗		(2.6)	台 6.4	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	
34	15トレ付近	K・碗		(3.1)	台 6.1	密	良好	淡灰褐色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
35	14トレ	K・碗		(2.3)	台 6.0	密	良好	灰褐色	ロクロナデ、底糸切り	
36	15トレ•灰原	K・碗		(2.2)	台 5.8	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	
37	14トレ	K・碗		(2.0)	台 6.6	密	良好	灰褐色	ロクロナデ、底糸切り	
38	14トレ	K・碗		(2.4)	台 6.0	密	良好	暗灰色	ロクロナデ、底糸切り	
39	14トレ	K・碗		(2.5)	台 5.6	密	良好	暗灰色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
40	14トレ	K・碗		(2.8)	台 6.8	密	良好	暗灰色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
41	16トレ•灰原	K・碗		(3.2)	台 6.2	密	良好	暗灰色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
42	17トレ•灰原	K・碗		(3.3)	台 6.6	密	良好	暗灰色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
43	15トレ•灰原	K・碗		(3.1)	台 7.0	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	
44	14トレ	K・碗		(3.4)	台 7.8	密	良好	暗灰色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
45	14トレ	K・碗		(2.4)	台 6.2	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	
46	14トレ	K・碗		(3.2)	台 6.4	密	良好	茶灰色	ロクロナデ、底糸切り	
47	13トレ	K・碗		(2.2)	台 7.4	密	良好	淡灰白色	ロクロナデ、底糸切り	
48	15トレ•灰原	K・碗		(5.5)	台 8.2	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
49	8トレ	K・碗		(3.1)	台 6.0	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	
50	15トレ•灰原	K・碗		(2.1)	台 6.3	密	良好	淡灰褐色	ロクロナデ、底糸切り	
51	15トレ•灰原	K・碗		(3.9)	台 6.2	密	良好	暗灰色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
52	14トレ	K・碗		(3.1)	台 8.2	密	良好	暗灰色	ロクロナデ、底糸切り	
53	14トレ	K・碗		(4.0)	台 7.6	密	良好	茶灰色	ロクロナデ、底糸切り	
54	14トレ	K・碗		(3.2)	台 7.4	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	

遺物No.	層位・遺構	種類・器種	口径	器高	底径等	胎土	焼成	色調	調整等	備考
55	16トレ付近	K・碗		(4.6)	台 7.4	密	良好	淡灰褐色	ロクロナデ、底糸切り	
56	8トレ	K・碗		(3.2)	台 7.4	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	
57	15トレ・灰原	K・碗		(3.8)	台 7.8	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	
58	8トレ	K・碗		(3.6)	台 7.0	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
59	14トレ	K・碗		(4.0)	台 7.2	密	良好	灰褐色	ロクロナデ、底糸切り	
60	16トレ・灰原	K・碗		(3.8)	台 8.0	密	良好	暗灰色	ロクロナデ、底糸切り	
61	16トレ・灰原	K・碗		(3.2)	台 7.4	密	良好	淡灰褐色	ロクロナデ、底糸切り	
62	14トレ	K・碗		(3.3)	台 6.8	密	良好	暗灰色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
63	14トレ	K・碗		(5.0)	台 7.8	密	良好	淡灰褐色	ロクロナデ、底糸切り	
64	14トレ	K・碗		(3.5)	台 7.8	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
65	15トレ	K・碗		(3.1)	台 6.2	密	良好	暗灰色	ロクロナデ、底糸切り	
66	14トレ	K・碗		(2.9)	台 6.8	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	
67	14トレ	K・碗	13.4	4.5	台 6.8	密	ヤヤ不良	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	
68	14トレ	K・碗		(6.7)	台 6.8	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
69	14トレ	K・碗	14.0	5.5	台 7.0	密	ヤヤ不良	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
70	14トレ	K・碗		(4.5)	台 7.8	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	
71	14トレ	K・碗		(3.2)	台 7.0	密	ヤヤ不良	暗灰色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
72	14トレ	K・皿	12.6	2.5	台 5.8	密	良好	暗灰色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
73	14トレ	K・皿	13.0	2.2	台 6.0	密	良好	暗灰色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
74	14トレ	K・段皿	14.4	3.0	台 7.0	密	良好	暗灰色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
75	14トレ	K・段皿	14.0	(2.4)		密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
76	15トレ・灰原	K・碗か皿		(2.2)	台 7.6	密	良好	暗灰色	ロクロナデ、底糸切り	
77	17トレ・灰原	K・碗か皿		(1.2)	台 5.6	密	良好	暗灰色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
78	16トレ・灰原	K・碗か皿		(2.2)	台 5.6	密	良好	暗灰色	ロクロナデ、底糸切り	
79	14トレ	K・碗か皿		(2.4)	台 6.0	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	
80	15トレ・灰原	K・碗か皿		(1.6)	台 7.0	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	
81	14トレ	K・碗か皿		(1.3)	台 6.0	密	ヤヤ不良	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	
82	17トレ	K・碗か皿		(2.1)	台 7.2	密	良好	暗灰色	ロクロナデ、底糸切り	
83	14トレ	K・碗か皿		(2.4)	台 6.6	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	
84	17トレ・灰原	K・碗か皿		(1.4)	台 7.2	密	ヤヤ不良	淡灰褐色	ロクロナデ、底糸切り	
85	8トレ	K・碗か皿		(1.9)	台 6.6	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	
86	14トレ	K・碗か皿		(2.3)	台 6.6	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	
87	8トレ	K・碗か皿		(3.0)	台 7.2	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	
88	16トレ・灰原	K・碗か皿		(3.0)	台 7.8	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	灰釉
89	15トレ・灰原	K・碗か皿		(2.4)	台 6.8	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	
90	14トレ	K・碗か皿		(2.6)	台 7.4	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	
91	15トレ・灰原	K・碗か皿		(3.2)	台 8.4	密	良好	灰白色	ロクロナデ、底糸切り	
92	14トレ	K・碗か皿		(2.2)	台 8.1	密	良好	暗灰色	ロクロナデ、底糸切り	
93	15トレ・灰原	K・長頸瓶	21.4	(11.1)		密	良好	灰白色	ロクロナデ	灰釉
94	14トレ	K・長頸瓶	16.0	(11.0)		密	良好	灰褐色	ロクロナデ	
95	14トレ	K・長頸瓶	19.0	(8.3)		密	良好	灰白色	ロクロナデ	
96	17トレ・灰原	K・長頸瓶	20.2	(6.3)		密	良好	灰白色	ロクロナデ	
97	14トレ	K・長頸瓶	18.6	(1.9)		密	良好	灰白色	ロクロナデ	
98	15トレ・灰原	K・長頸瓶	19.0	(6.9)		密	良好	暗灰色	ロクロナデ	
99	15トレ・灰原	K・長頸瓶	14.4	(3.3)		密	良好	灰白色	ロクロナデ	
100	14トレ	K・長頸瓶	20.0	(2.0)		密	良好	灰白色	ロクロナデ	
101	15トレ・灰原	K・長頸瓶		(5.0)	頸11.8	密	良好	灰白色	ロクロナデ	
102	15トレ付近	K・長頸瓶		(4.6)	頸7.8	密	良好	灰白色	ロクロナデ	
103	14トレ	K・長頸瓶		(5.8)	頸8.2	密	良好	灰白色	ロクロナデ	灰釉
104	15トレ・灰原	K・長頸瓶		(3.4)	頸11.2	密	良好	暗灰色	ロクロナデ	灰釉
105	14トレ	K・長頸瓶		(5.3)	頸9.2	密	ヤヤ不良	暗灰色	ロクロナデ	
106	8トレ	K・長頸瓶		(9.2)	頸9.6	密	良好	灰白色	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	
107	15トレ・灰原	K・瓶		(4.5)	台 12.4	密	良好	灰白色	回転ヘラケズリ・ロクロナデ	
108	8トレ			(25.0)	台 11.4	密	良好	灰白色	回転ヘラケズリ・ロクロナデ	

※種類のSは須恵器、Kは灰釉陶器。口径・器高・底径の単位はcm、（　）は残存値。

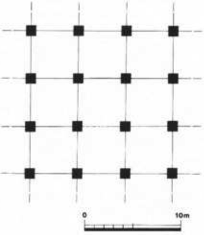
第4章　平成6年度調査

平成6年度の調査は、保安林部分を対象に行った（第3図参照）。この部分は当初は保安林であったため、開発対象地域から除外してあった。このため、調査対象地域からも除外し、試掘調査を行わなかった地区である。しかし、開発計画が進行するなかで、この保安林部分を解除して新たに散策路をつくる計画が急浮上した。この地区内からは、現在まで埋蔵文化財は確認されていないが、古窯址のある台地斜面と同一台地縁部で、古窯址等の埋蔵文化財が存在している可能性は否定できなかった。開発計画概要は保安林部分の台地を一部の樹木を残して削平し、散策路を設置するというような造成工事を行うということであった。このため、担当部局の工業勤労課と文化振興課と再協議した結果、埋蔵文化財の有無の確認調査を行うことに決定し、平成7年3月27日～3月31日の期間に豊橋遺跡調査会が調査を行った。

調査対象地域は雑木林で樹木が生い茂っており、地表面も枯葉等で多い尽くされていた。踏査では遺物が散布しているか否かも確認できず、また樹木によって試掘トレンチも自由に設定できない状況であった。また台地西端は百々川の河川改修によってかなり削平されていた。このために、調査を以下の方法で行った。

調査の方法

1．確認調査対象地域に5mメッシュの任意のグリッドを設定し、地区割りをする。
2．メッシュの交点を中心に1m四方大のグリッドを更に設定する。
3．1m大に設定したグリッド内に対し、枯葉等の堆積物を除去して地表を露出させる。
4．露出した地表を精査して遺物の有無を確認し、遺跡を探す。



第9図　グリッドシステム図（1／400）
（■で表された範囲内を調査）

このような方法を基本として分布調査を行った。そして、古窯址の存在が予想される台地斜面に対しては任意に試掘トレンチを設定し、確認調査を行った。なお、河川改修によって削平されている部分については、削平部の断面観察による遺構・遺物の確認にとどめた。

調査の結果、分布調査、試掘調査及び河川改修による削平部断面観察から遺構・遺物は確認できず、埋蔵文化財は存在していなかったことが判明した。

第5章　まとめ

今回、豊橋リサーチパーク内の平成5・6年度試掘調査の結果、造成範囲内には百々池B古窯址の他には遺構は確認されず、遺物も陶器1点が出土したのみであった。このため造成範囲内には古窯址以外は埋蔵文化財は存在していないと判断した。古窯址周辺には地形等の制約を受けながらも試掘し、灰原の範囲を推定することができた。しかし、窯体については確認できなかった。

それでは調査の結果を基に、百々池B古窯址の位置、操業時期、保存状態等を推定してまとめとしたい。まず、窯体の位置であるが、今回は確定することができなかった。しかし、14トレンチの西端には窯体と関係すると思われる凹み部があり、凹み部の底部には焼土が認められている。側面には窯壁が存在したことから、14トレンチ周辺に窯体が存在していたものと思われる。窯体が存在していたと考えられる台地斜面は予想以上に削平されているようで、窯体が何基あったのかはわからない。

窯体に伴う灰原の範囲であるが、灰原が確認できたのは14～17トレンチで、その周囲、西側の8トレンチ、南側の9トレンチ、東側の10トレンチ、北側の13トレンチからは灰原は確認されなかった。このため、灰原は約8m×12mの範囲（第8図）に収まるものと推定される。灰原の厚さは、15トレンチで検出されたものが一番厚く、38cmを測った。灰原の層序は、基本的には黒色砂質土の灰層のみであり、分層はできなかった。灰原は部分的に破壊されているものの、残存部の保存状態は良好である。

次に出土遺物について考えよう。出土遺物には須恵器と灰釉陶器がみられた。灰釉陶器は灰原及び表土、攪乱部中から出土しているものであるが、大半は灰原資料と考えても良いものと思われる。しかし、出土地点・層位からは時期的な検討は難しい。このため、型式学的特徴を捉え易い碗を基に検討し、時間的な位置づけをする。

出土した碗の器形は、口縁部が緩やかに内湾し、端部付近でやや外方に開くか真っ直ぐのものであり、体部が直線的に開くものはみられなかった。体部の調整は内外面ロクロナデであり、体部下半を回転ヘラケズリで調整するものもない。高台形は角高台はなく、三日月高台がみられたが幅広で低く、くずれかけたものが多かった。三角高台もみられたが、細く高い高台が多い傾向であった。底部は糸切り未調整で、ヘラ切りのものはなかった。釉については、ハケ塗りのものはなく全て漬け掛けであり、無釉のものも若干存在していた。また、出土遺物のなかには三叉トチはみられず、碗内面にも使用した痕跡はみられない。このため、これらの碗の焼成方法は重ね焼きが行われたものと思われる。一方、須恵器は無高台の坏身であり、灰釉陶器生産と併行する時期のものと考えられる。これらの特徴を総合して検討すると猿投窯編年（註1）の黒笹14号窯式（K－14）・黒笹90号窯式（K－90）はみられず、折戸53号窯式（O－53）～東山72号窯式（H－72）の特徴と合致する。つまり、碗の型式学的特徴及び無釉碗の存在、重ね焼きの焼成技法等からO－53～H－72段階と判断した。猿投窯及び篠岡窯ではO－53段階が須恵器を焼成する最後の段階といわれており、今回の出土遺物中に須恵器・坏身が存在していることもO－53段階と判断する要因の一つである。O－53段階は高台形が様々で、存続時期も長いことから整理されるべき問題点も含むため、今回は個々の遺物を各窯式に当てはめることはしない。

以上述べたように、百々池Ｂ古窯址は１基以上で操業していた古窯址と思われる。古窯址の操業時期は、東山72号窯式（Ｈ－72）を中心とし、折戸53号窯式（Ｏ－53）も含む時期であろう。

今回は灰原の位置は確認されたが、範囲確認調査であるため窯体の位置は確認できなかった。だが幸いにも、造成計画以前に存在が確認できたため、百々池Ｂ古窯址は公園として保存される予定となった。市内の古窯が消滅するなかで、保存される貴重な例といえよう。

註１　楢崎彰一1983 「７．付・猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ)』

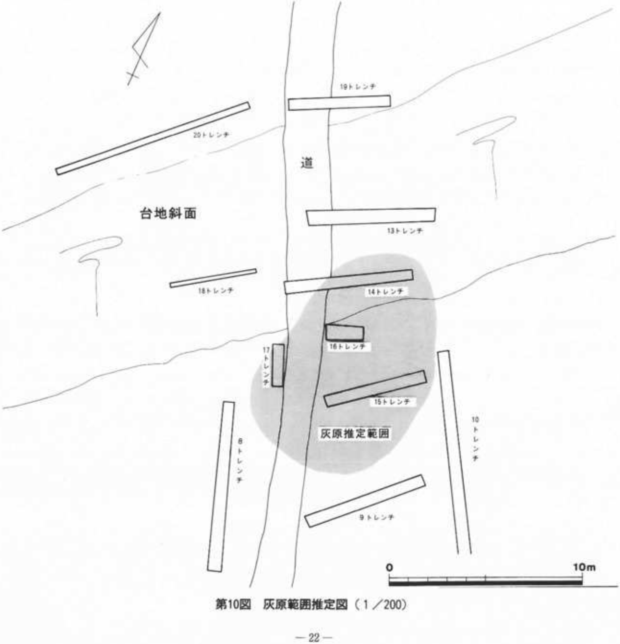
参考文献

愛知県建築部・小牧市教育委員会　1984 『桃花台ニュータウン遺跡調査報告』Ｖ

愛知県建築部・小牧市教育委員会　1984 『桃花台ニュータウン遺跡調査報告』Ⅵ

小牧市教育委員会　1987 『桃花台沿線開発事業地区内埋蔵文化財発掘調査報告書』

藤澤良祐　1982 「瀬戸古窯址群Ｉ」『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ｉ』



第10図　灰原範囲推定図（１／200）

写 真 図 版

1. 8トレンチ全景（南から）

2. 13トレンチ全景（東から）

3. 14トレンチ全景（西から）

4. 15トレンチ全景（東から）

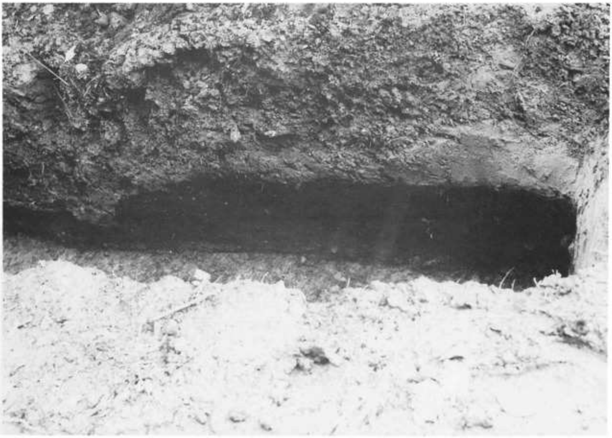
1． 16トレンチ全景（西から）

2． 17トレンチ全景（南から）

3． 18トレンチ全景（東から）

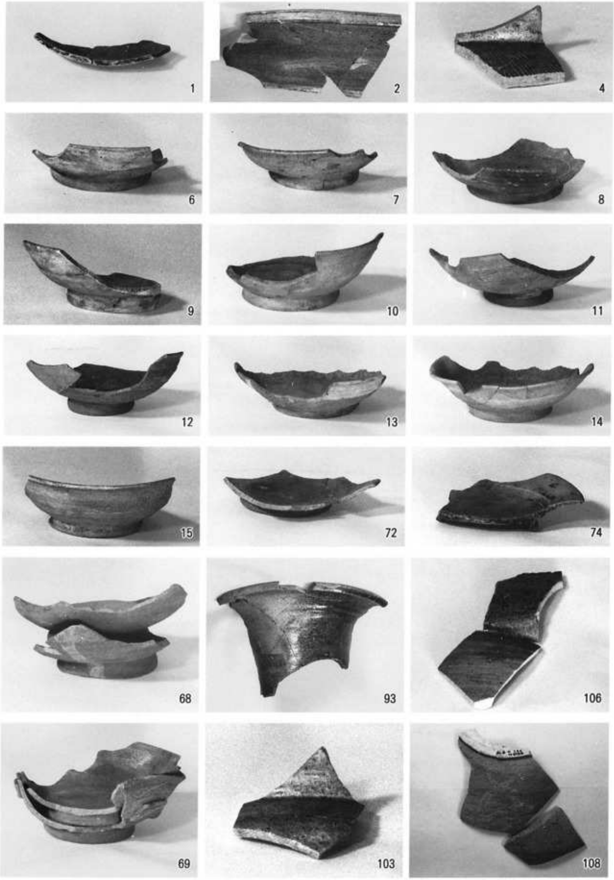
4． 19トレンチ全景（西から）

1． 14トレンチ西端凹み部（南から）



2． 13トレンチ灰原堆積状況（南東から）

写真図版 4



出　土　遺　物

東田遺跡(II)

豊橋競輪場インタビュールーム建設に伴う発掘調査報告書

例　　言

1．本書は、豊橋市東田町87番地の豊橋競輪場インタビュールーム建設に伴い実施された埋蔵文化財調査の報告書である。調査期間は、平成7年4月3日～4月6日である。

2．調査は豊橋市が豊橋遺跡調査会に委託して行い、岩瀬彰利（教育委員会文化振興課文化財係）が調査指導に当たった。

3．報告書作成にあたり、遺物・遺構等の実測・拓本・トレース等については、多田美香、副島さや子、山本絢子、稲石純子各氏の援助を受けた。また、写真撮影は岩瀬が行った。

4．発掘調査に際しては事業担当課である競輪事業課より援助を受けた。発掘作業、整理作業については、地元の方々の御協力を得ることができた。記して感謝の意を表す次第である。

5．本書の執筆・編集は岩瀬が行った。

6．本書に使用した方位は磁北である。遺物・遺構のスケールについてはそれぞれに明示した。なお、写真の縮尺は任意である。

7．本調査にあたって作成した写真・カラースライド・実測図等の記録、出土遺物は豊橋市教育委員会において保管している。

目　　次

第１章　遺跡の立地と歴史的環境

１．遺跡の立地 ……………………………………………………………… 1
２．歴史的環境 ……………………………………………………………… 4

第２章　調査の経過 ……………………………………………………… 7

第３章　遺構・遺物

１．遺構 ……………………………………………………………………… 9
２．遺物 ……………………………………………………………………… 11

第４章　まとめ ………………………………………………………… 11

挿 図 目 次

第１図　東田遺跡位置図（１／50,000） ………………………………… 2
第２図　東田遺跡周辺図－明治32年－（１／50,000） ……………… 3
第３図　東田遺跡周辺地形復元図（１／5,000） ……………………… 3
第４図　東田遺跡周辺部主要遺跡分布図（１／10,000） …………… 5
第５図　調査区位置図（１／2,500） …………………………………… 7
第６図　Ｂ地区位置図（１／500） ……………………………………… 8
第７図　調査区全体図（１／40） ……………………………………… 10
第８図　出土遺物実測図（１／３） …………………………………… 11

表 目 次

第１表　遺跡地名表 …………………………………………………………… 6
第２表　出土遺物観察表 ……………………………………………………… 11

写真図版目次

図版１　　東田遺跡調査区全景（南から）
　２－１　ＳＫ－１（東から）　　　　　２　ＳＫ－２（東から）
　　　３　出土遺物

第1章　遺跡の立地と歴史的環境

1．遺跡の立地（第1～3図）

東田遺跡は豊橋市東田町の豊橋競輪場一帯に所在する遺跡である（第1図）。豊橋市は東を弓張山地、南を太平洋、西を三河湾にそれぞれ面し、平野部が限られている。市域北側は一級河川である豊川が三河湾に向かって西流し、市域の大半は豊川と現在浜松市を貫流する天竜川の前身である古天竜川によって造られた河岸段丘上に位置している。河岸段丘は高位面（天伯原面・標高30～60ｍ）、中位面（高師原面・豊橋上位面・標高15～30ｍ）、低位面（豊橋面・標高4～10ｍ）の大きく3面に分けることができる。

東田遺跡の所在する東田地区は豊川左岸の河岸段丘・豊橋上位面にあり、北方を朝倉川が流れている。朝倉川はこの地区の東方約4㎞の多米地区の山地に源を発し、この段丘を開析して大きく分割しながら豊川に注ぐ豊川の支流の小河川である。

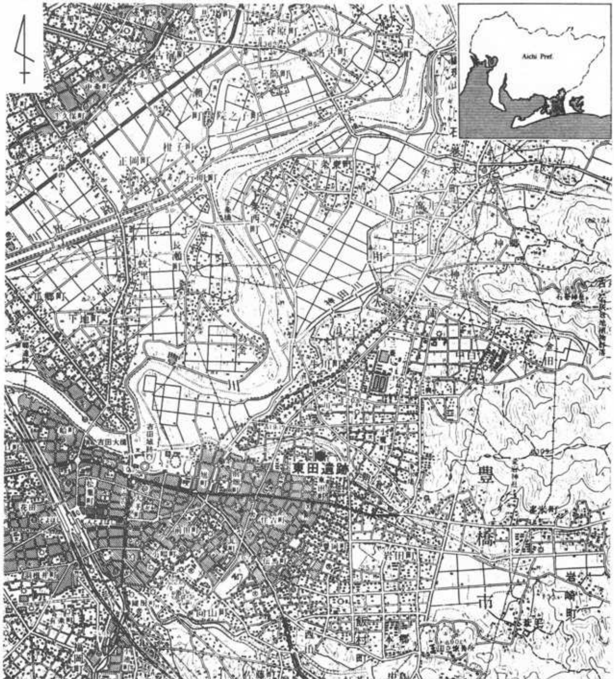
東田遺跡は朝倉川を望む段丘北部中央付近に位置し、標高14ｍ前後を測る。この段丘は標高約20ｍを頂点に北方は朝倉川に向かって緩やかに傾斜し、標高15ｍ付近で比較的フラットに広がり張り出している。朝倉川はこの部分を迂回するように湾曲しながら流れる。

遺跡周辺は、現在は競輪場や野球場などのスポーツ施設が造られ、周辺には住宅が密集し旧地形が把握し難いぐらい開発されているが、明治32年の古地図（第2図）が示すように競輪場が造られる以前は集落が殆どなく、雑木林が繁り小川によって開析された段丘であったようである。今回調査した地点は標高20ｍ程の段丘高位面から一段降りた標高15ｍ前後の比較的平坦な段丘西の縁部に位置している（第3図）。調査地点のすぐ西は、風雨によって開析された小規模な谷が朝倉川に向かって進んでいる。調査区内では台地が北西方向に緩やかに傾斜しており、台地縁部に位置することを示している。

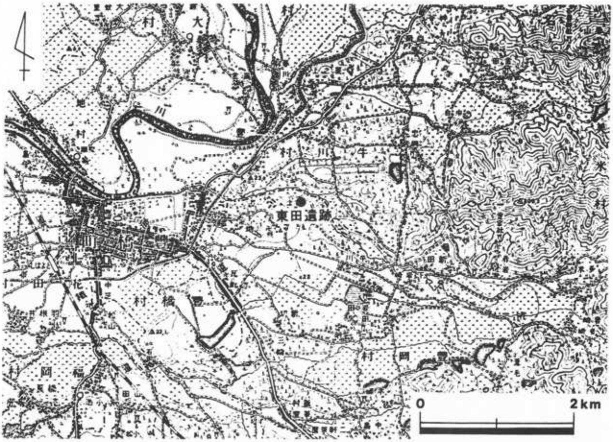
集落は調査地点から東側の平坦面を中心に形成されていたと考えられ、集落が形成された古墳時代は、朝倉川に接した水の補給の容易な自然条件のよい立地であったことが想定される。また、段丘最高位ではなく一段下がった朝倉川に接する段丘上に所在するため、船等の発着が容易であり交通に便利な地区であったといえよう。このように、遺跡の立地条件は災害面と交通・生活面において良好なものであったことが想定される。

参考文献

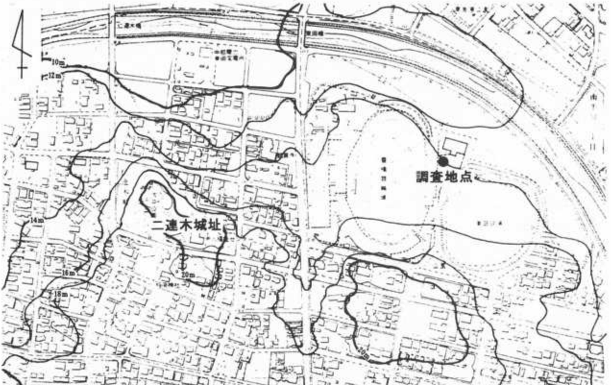
豊橋市史編集委員会　1973　『豊橋市史』第1巻
豊橋市教育委員会　1987　『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集　水神古窯』
豊橋市教育委員会　1989　『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第10集　桜遺跡試掘調査報告書』
豊橋市教育委員会　1990　『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第11集　見丁塚遺跡』
豊橋市教育委員会他　1995　『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第25集　東田遺跡』



第１図　東田遺跡位置図（１／50,000）



第2図　東田遺跡周辺図－明治32年－（1／50,000）



第3図　東田遺跡周辺地形復元図（1／5,000）

2．歴史的環境（第4図・第1表）

東田遺跡は古くからその所在が知られており、東田遺跡の所在する東田地区は遺跡の多い地域である。ここでは東田地区及び朝倉川を挟んだ対岸の牛川地区の主要な遺跡の概要を紹介する。

縄文時代は、小規模な遺跡が多く知られ土器や石器等が採集されているが、遺構は殆ど検出されていない。これらの遺跡のうち、おいほて遺跡（17)、眼鏡下池北遺跡（29)、浪ノ上遺跡（33）からは縄文時代早期の神宮寺式併行の押型文土器が出土している。特に浪ノ上遺跡では、1982年の発掘において押型文期の竪穴住居址1軒と平地式住居址6・7軒が検出されたといわれるが詳細は不明である。この他にも西側北遺跡（22）からは前期中葉の北白川下層Ⅱ式等が出土し、洗島遺跡（19）からは中期中葉の北屋敷式を中心とした土器と石器が出土している。また晩期になると熊野遺跡（28）等多くの遺跡から条痕文土器の破片が少量であるが出土し、台地縁辺部を集落が移動していたようである。

弥生時代では、浪ノ上遺跡をはじめ、西側遺跡（22)、東田遺跡（1）等多くの遺跡が見つかっている。このうち浪ノ上遺跡からは後期の欠山式期の竪穴住居址が多数検出されており、大規模な集落であったものと思われる。西側遺跡からは試掘調査によって弥生時代中期～古墳時代中期の土器等が出土しているが、住居址等の遺構は検出されていない。しかし、弥生時代後期のハマグリ主体の小貝塚を伴っていることが確認されている。東田遺跡からは今回の調査では出土していないが、以前に中期の弥生土器（長床式）と土壙が検出されたことが知られている。

古墳時代は、集落址では今回調査した東田遺跡や浪ノ上遺跡、西側遺跡、西先原遺跡（11)、西小鷹野遺跡（7）等がある。大半の遺跡は弥生時代から継続する遺跡であるが、西小鷹野遺跡は古墳時代のみの散布地として知られている。

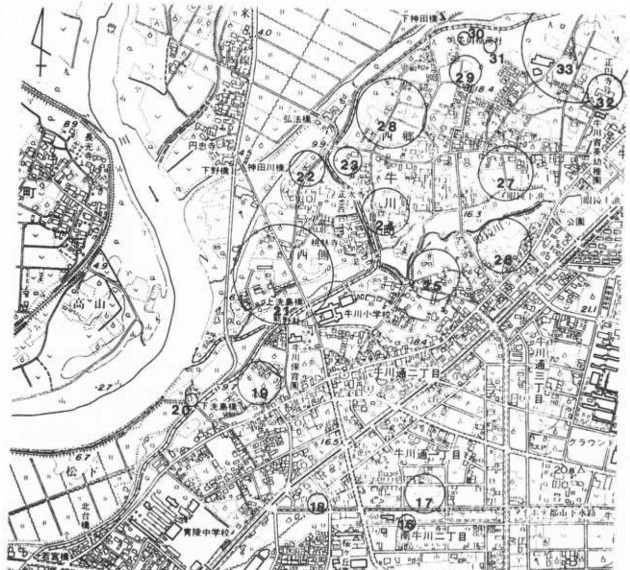
古墳では中期以降のものが見つかっており、東田古墳（4)、稲荷山1号墳（30)、稲荷山2号墳（31）等が知られている。東田古墳は中期の前方後円墳で、全長40ｍを測る。後円部からは鳥文鏡や直刀が出土し、墳丘上からは埴輪が出土している。豊川左岸では中期の前方後円墳が殆ど見つかっておらず、東田古墳はこの地域の首長墳であるものと推定される。稲荷山1・2号墳は中期頃の方墳と考えられ、おそらく群集墳を形成していたものと思われる。

古代以降では、集落址、古墓址、古窯址、城址等がみられる。古代の遺跡には西先原遺跡があり、奈良時代の道路状遺構や柵列が検出されている。この地区の集落址は、調査によって様相が判明したものは少なく遺物が出土しているだけの例が多いが、熊野遺跡は調査によって中世の掘立柱建物址がまとまって検出された好例である。

古墓址では、西側古墓群（23）が知られている。西側古墓群は、調査で常滑焼の蔵骨器と礫等の埋納遺構が検出されている。

古窯址では、牛川焼窯址（20）が存在している。牛川焼窯址は江戸時代に牛川焼を焼いた窯であるが、調査されていないため詳細は不明な点が多い。

城址では、戸田氏の居城である二連木城址（2）や浪之上古屋敷跡（32）が知られている。二連木



第4図　東田遺跡周辺部主要遺跡分布図（1／10,000）

城址は現在は大口公園となっており、土塁や空堀が残存している。浪之上古屋敷跡は戸田氏の館址といわれているが、遺構が残っておらず、現在は寺院や宅地になっている。

第1表　遺跡地名表

	遺跡名	時期		遺跡名	時期
1	東田遺跡	弥生・古墳・中世	18	牛川北遺跡	中世・近世
2	二連木城址	中世	19	洗島遺跡	縄文・古墳・中世
3	東郷遺跡	弥生	20	牛川焼窯址	近世
4	東田古墳	古墳	21	西側遺跡	弥生・古墳・中世
5	仁連木西遺跡	中世・近世	22	西側北遺跡	縄文～古墳・古代
6	仁連木遺跡	弥生	23	西側古墓群	中世
7	西小鷹野遺跡	古墳	24	東側遺跡	古代～近世
8	もぐら沢遺跡	中世・近世	25	中郷西遺跡	中世・近世
9	南牛川C遺跡	縄文	26	中郷遺跡	中世・近世
10	東先原遺跡	縄文	27	眼鏡池北遺跡	縄文・弥生・古代
11	西先原遺跡	縄文・弥生・古代	28	熊野遺跡	縄文～古墳・中世
12	南牛川A遺跡	中世・近世	29	稲荷前遺跡	縄文・弥生
13	南牛川D遺跡	弥生	30	稲荷山1号墳	古墳
14	薬師寺遺跡	中世・近世	31	稲荷山2号墳	古墳
15	薬師遺跡	縄文	32	浪之上古屋敷跡	中世
16	牛川B遺跡	古墳	33	浪ノ上遺跡	縄文～古墳
17	おいほて遺跡	縄文・弥生			

参考文献

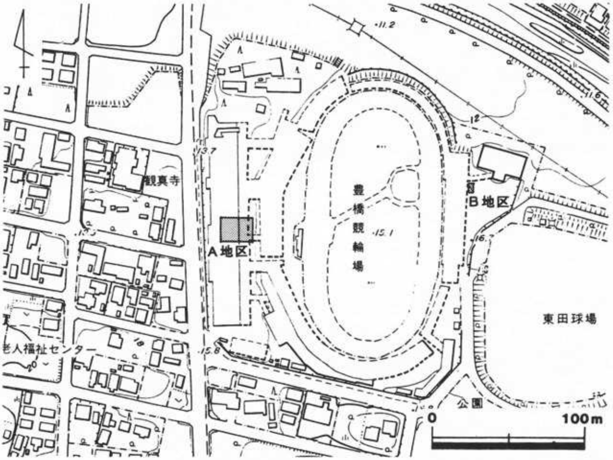
木下克己　1975　『愛知県八名郡の先史遺跡』
愛知大学考古学研究会　1982　『発掘速報掘るじゃん』第3号
豊橋市教育委員会　1982　『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集』
豊橋市教育委員会　1991　『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第12集　牛川西部地区遺跡範囲確認調査報告書』
豊橋市教育委員会他　1995　『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第23集　熊野遺跡』
豊橋市教育委員会他　1995　『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第25集　東田遺跡』

第2章　調査の経過

豊橋市東田町字87番地に所在する豊橋競輪場では、施設の老朽化により観客の安全が確保できなくなったため、メインスタンドの改築及び場内の環境整備を行うこととなった。まず最初は、平成6年度にメインスタンドを改築し平成8年5月に完成予定、以下、順次各施設を改築する計画であった。

このメインスタンド建設工事の際には平成7年1月5日～1月18日の期間で発掘調査を行っている。調査では、古墳時代後期の竪穴住居址2軒と中世の掘立柱建物址2棟及び幅4m程の浅い溝等が検出された。このうち、竪穴住居址1軒は1辺が7m程の大型なもので、平面形は方形であった。遺構は多く検出されたが遺物の出土量は極めて少なく、試掘・本調査合わせてもコンテナ（54×33×20cm）1箱にも満たなかった。

今回は、平成7年度予算で検車場及びインタビュールームを建設することとなった。工事に先立ち、市教育委員会文化振興課と事業者である豊橋市（競輪事業課担当）で協議し、検車場は同一部分の建て替えであるため調査対象地から除外し、新たに新設するインタビュールームについての扱いを問題にした。インタビュールーム設置場所は現段階では駐車場として使用され建物は建っておらず、地形を復元すると台地の端部付近に相当し、前回調査で見つかった古墳時代の集落がここまで及んでいることが予想された。このため、面積が55㎡と小さいこともあり、試掘調査を兼ねて建物範囲全体に対



第5図　調査区位置図（1／2,500）

し発掘調査を行うことで合意した。発掘調査は豊橋市教育委員会から依頼を受けた豊橋遺跡調査会が行い、調査費用は事業者が全額負担することになった。

発掘調査は平成7年4月3日～4月6日の4日間で行った。当初、良好に遺構が残存しているものと予想していたが、表土を剥いでみると調査区内には現在ある建物に接続する水道管・ガス管等が多数入っており、遺構面は各種の配管によって殆ど破壊されていることがわかった。このため残存している僅かな地山面を精査して遺構を検出している。検出された遺構は土壙のみで、中世陶器の細片の出土した土壙も1基確認されている。

第6図　B地区位置図（1／500）

第3章　遺構・遺物

1．遺構（第7図）

今回の調査区内は、各種管が埋設されており、遺構は大半が破壊されていた。このため検出できたものは土壙のみである（第7図)。ここでは検出された土壙に関して記載する。記載にあたっては土壙はＳＫと表記する。

ＳＫ－1

長径90cm以上、短径54cmの楕円形をなし、深さは14cmを測る。土壙北西端は他の土壙に壊されている。土壙からは中世陶器・碗の細片が出土している。

ＳＫ－2

径56cmの円形をなし、深さは24cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ－3

長径50cm以上、深さ26cmの土壙で、平面形はおそらく楕円形になるものと思われる。土壙西側は調査区外で、北側はＳＫ－１に壊されている。遺物は出土していない。

ＳＫ－4

長径48cm、短形32cmの楕円形をなし、深さは11cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ－5

径28cmの円形をなし、深さは11cmを測る。土壙の西側は、ＳＫ－４とＳＫ－６によって切られている。遺物は出土していない。

ＳＫ－6

径38cmの円形をなし、深さは13cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ－7

長径36cm、短径30cmの方形に近い形をなし、深さは12cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ－8

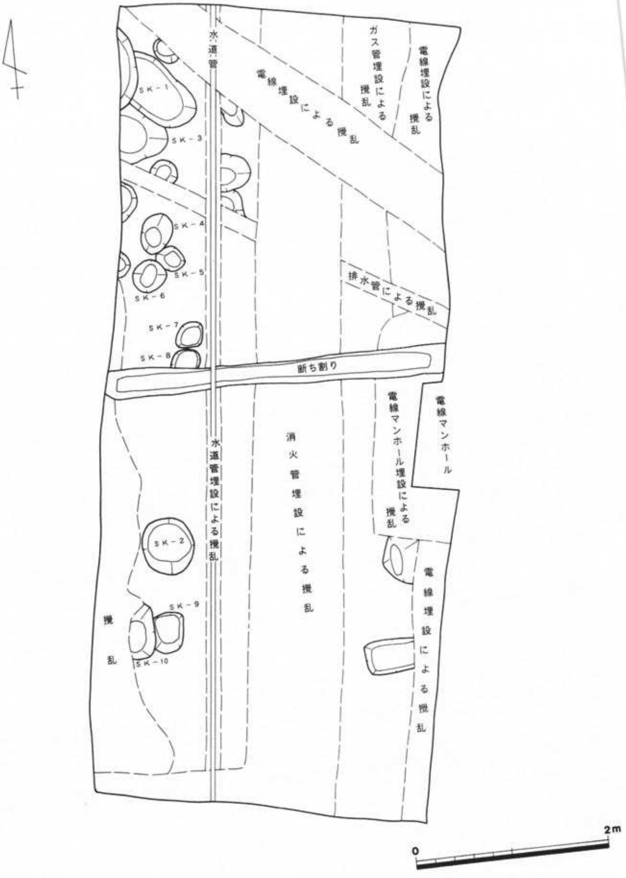
径28cmの円形をなし、深さは24cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ－9

長径42cmの方形をなし、深さは21cmを測る。土壙の西端はＳＫ－10によって壊されている。遺物は出土していない。

ＳＫ－10

長径60cm以上の楕円形をなすものと思われるが、土壙西側は攪乱によって壊されている。深さは17cmを測る。遺物は出土していない。

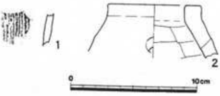


第7図　調査区全体図（1／40）

2．遺物（第8図、第2表）

出土した遺物は全部で11点と極めて少なく、遺構に伴うものはＳＫ－２から出土した中世陶器・碗の破片のみであった。出土遺物は中世陶器・碗破片１点、近世陶器片２点、土師器片８点である。ここでは図示可能な出土遺物を説明する。

１は土師器・甕の体部破片である。調整は内外面ハケメで、古墳時代のものと思われる。２は器種不明の土師器の口縁部破片である。口径は小さく、口縁端部に面をもつ。口縁部から体部にかけて外方に屈曲し、体部に孔を有す。調整は外面ナデ、内面板ナデであり、中世頃のものと思われる。



第8図　出土遺物実測図（１／３）

第2表　遺物観察表

遺物No.	層位・遺構	種類・器種	口径	器高	胎土	焼成	色調	調整等	備考
8－1	表土	土師器・甕			密	良好	淡赤褐色	内外面ハケメ	
－2	表土	土師器	7	(3.7)	密	良好	淡赤褐色	外面ナデ、内面板ナデ	

※口径・器高の単位はcm、（　）は残存値。

第5章　まとめ

今回の調査では、水道管等の埋設による攪乱が著しいのにもかかわらず、20基の土壙と11点の土器片が出土した。ここでは、検出された遺構や遺物を検討し、遺跡の性格を簡単にまとめよう。前回の調査で、東田遺跡は古墳時代（６世紀後葉～７世紀初頭）と中世を中心とした集落址であることが明らかになった。今回の調査で検出された遺構には、明確に古墳時代のものと断定できるものはなかった。しかし、表土中から古墳時代の遺物が出土していることからこの時期の遺構があったものと推定される。

中世の遺構は、ＳＫ－１が確認されている。この他にも土壙が存在しているものと思われるが、遺物が伴っていないため不明である。

このように、前回の調査で確認されている古墳時代及び中世の集落の範囲が、この地区周辺にまで広がっていたことが確認されたのは大きな成果といえよう。また、今回新たに近世陶器の破片も出土しており、近世の集落も存在していた可能性も考えられる。しかし、前回と同様に、弥生時代の遺物及び遺構は今回も見つからず、弥生時代の集落の存在は、今回の調査でも明らかにできなかった。

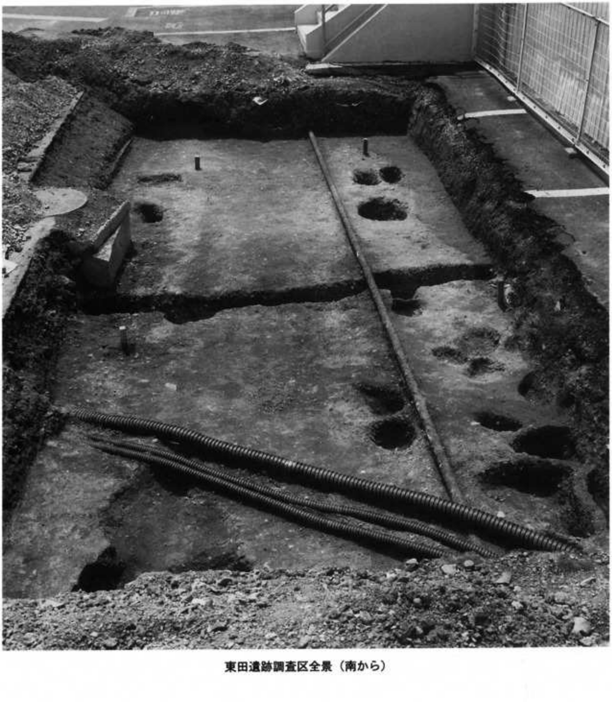
報 告 書 抄 録

フリガナ	ドドイケBコヨウ・アズマダイセキ（2）
書名	百々池B古窯・東田遺跡（Ⅱ）
副書名	
巻次	
シリーズ名	豊橋市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第32集
編著者名	岩瀬彰利
編集機関	豊橋市教育委員会
所在地	〒440 愛知県豊橋市向山大池町20－1（豊橋市民文化会館内）TEL 0532-61-5111
発行年西暦	1996年6月22日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ドドイケ 百々池B	トヨハシシニシミユキチョウ 豊橋市西幸町 アザハマイケ 字浜池	23201	79878	34° 43′ 10″	137° 24′ 50″	19930802～ 19930820 19950327～ 19950330	約550㎡ 約10㎡	工業団地造成 散策路造成
アズマダ 東田	トヨハシシアズマダチョウ 豊橋市東田町 バンチ 87番地	23201	79402	34° 46′ 00″	137° 25′ 10″	19950403～ 19950406	約50㎡	インタビュールーム建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
百々池B	古窯址	古代	灰原、土壙	灰釉陶器、須恵器	現状保存
東田	集落址	古墳・中世	土壙	土師器、中世陶器	

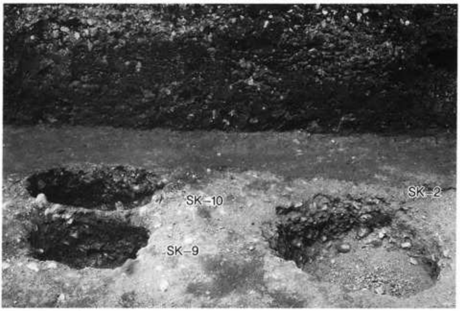
写　真　図　版



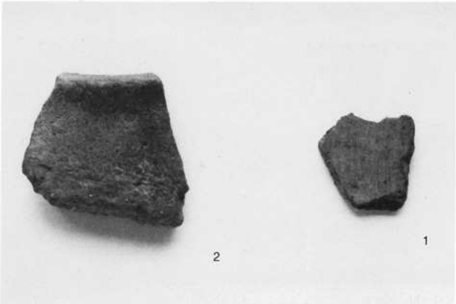
東田遺跡調査区全景（南から）

写真図版 2

1．ＳＫ－１（東から）



2．ＳＫ－２（東から）



3．出 土 遺 物

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第32集

百　々　池　B　古　窯
東　田　遺　跡　(II)

平成8年6月22日

発　行　豊橋市教育委員会©
文化振興課
〒440　豊橋市向山大池町20－1

印　刷　カネテック